

令和〇年（少）第〇号 住居侵入、準強制わいせつ保護事件

## 付添人意見書

令和〇年〇月〇日

福岡家庭裁判所 御中

少年 〇〇 〇 〇

付添人弁護士 福岡 九州男

少年に対する頭書事件について、付添人の意見は以下のとおりである。

### 意見の趣旨

少年については、保護観察処分とするのが相当である。

### 意見の理由

#### 第1 非行事実について

本件非行は、少年が被害者の住宅に侵入し、睡眠中の被害者に対し、胸を触るなどのわいせつ行為を行ったが、被害者が起きたため、逃走したというものである。非行事実については、争いはなく、少年も、素直に認めている。

本件非行は、常習的に行ったものではない。また、少年は、捜査段階から一貫して非行事実を認め、自分のしてしまったことを振り返ろうとしていた。

したがって、非行事実からは少年の非行傾向が進んでいるということとはできない。

## 第2 要保護性について

### 1 少年の性格等について

- (1) 少年は、警察署で初めて会った付添人ともたくさんの会話ができていた。2回目に会ったときには、明るく趣味の釣りのことや昔の話もしてくれた。素直な性格で、周りの言うことを拒絶することなく、少年なりに考えたうえで受け入れようとする姿勢がある。
- (2) 他方で、少年自身の自己分析として、周りが見えない、という性格がある。周りが見えず、これと決めたらそれしか見えず、自分でやりきりたいという性格でもある。学生時代にバスケットボールをしていたとき、周りからボールを持ちすぎていると指摘されることや、仕事の際も、周りを見ながら仕事をしろと注意されることがあった。
- (3) この周りの見えない性格というのは、本件非行にも関係している。少年は、今回の非行について、2カ月間性行為をしていなかったことや本件非行に及んだ当日に性行為をする相手が見つからなかったことから、性欲が爆発しそうで、「あの家にいる女の子かお母さんとSEXできたらいいな」と考え、本件非行に及んでいる。

鑑別所において、少年は、「周りが見えないこと」の意味を付添人とともに考えた。周りが見えないというのは、周囲の状況をみながら周囲の状況の変化に応じて自分の行動も変えていくことができず、先のことも考えられていない、という意味もあることを考えた。

本件非行も、少年の性に対する考え方の問題性だけでは説明することはできず、このような周囲の見えなさという性格も影響している。そして、少年自身も、本件非行について、少年のそのような性格が影響しているのではないか、共通点があるのではないか、と考

えるようになった。

もっとも、このような性格があるからといって非行性が深まっているわけではなく、仕事をしながら問題なく社会内で生活することができている。

- (4) 少年は、性に対する考え方が、「我々の考える通常の人」とはずれているようにも感じられる。しかし、考え方がゆがんでいるとか、異常であるということではない。少年の語彙・表現の少なさから、周りが少年の言葉をそのまま受け取っているふしもある。

女性との関係性（男女間に上下が存在することなど）については、幼少期に適切な愛着関係が築けていないことから徐々にそのような考えを持つようになっていったと考えられるが、そのような考え方がすべからず間違っているものではない。女性を性行為の対象とだけみているわけではなく、自分を包み込んでくれる対象ともみており、性に対する一般常識から逸脱しているものではない。性風俗については、それを利用する大人がいるにもかかわらず、我々大人が、「正しい性の価値観」を一方的に決めつけるのは適切ではない。性についてはそのように「すべきか」という価値規範は、社会情勢にも影響し、簡単には決まらないはずである。間違っていることを指摘するだけではなく、どのように考えるのがよいのかを少年と一緒に考えていく必要がある。決して押しつけになってはいけない。

もっとも、お互いが納得できる男女関係や友人関係を築くには、少年自身の性格や性に対する考え方について、周りの大人ともっと多くのことを学び、自分なりの考え方を身に着ける必要がある。

非行からの離脱のためには、非行そのものに対する理解と自分の性格をもっと理解し、信頼できる大人との付き合いをすることで社会内での生活に適応していくことであると考えられる。特に、性に対

する考え方を客観的に見直すためには、専門家の手助けが必要になる。保護観察中には、性犯罪専門のプログラムもあり、社会内で生活することができる能力のある少年であれば、社会内で自分なりに性に対する考え方について、プログラムを受講しながら身に付けていくことが適切である。

## 2 本件非行に対する反省

### (1) 少年は、本件非行について、真摯に反省している。

少年が被疑者として、警察署にいた初めの頃は、自身の非行が悪いことであるということは分かっているものの、被害の実際等についてはあまり考えていなかった。

### (2) 鑑別所に入所してからは、性犯罪の被害者のことが書かれた書籍を読み、付添人に対して、「被害者の女の子は今どんな気持ちなのだろうか」と聞くようになった。「学校に行けているか、眠れないのではないか、あのときものすごい怖かったのではないか」といったことを考えるようになった。付添人からも、強姦の被害者のことについて「魂の殺人」と表現されていることなどを話した。

少年は、鑑別所において、じっくりと本件非行やこれまでの生活を見直し、それまで不足していた周りをみる考え、人の立場にたって考える力を身に着け始めている。

### (3) 今後は、被害者の気持ちを考え、親戚のいる他県で現場の仕事をしたいと話している。

このように、少年は、現在では、真剣に非行と向き合い、今後どのように生活していくべきかを考えることができている。

もちろん、付添人からみても、現状では被害者の気持ちについての考えは不十分である。しかし、それは当然である。自分自身の性

格の振り返りが不十分で自分自身が愛で満たされていないにもかかわらず、他人のことを考えるというのは順番が逆である。鑑別所の4週間では、ようやく自分自身のことを振り返ることができ、次のステップに進もうとしている。被害者の気持ちというのは長い時間をかけて理解し、自分の中で受け止めて、ようやく本当の反省ができるのである。

### 3 仕事について

少年は、学校を出てからは、現場の仕事やラーメン屋の仕事をしてきた。

「今後は、現場の仕事で経験をつみ、社長になって頑張っていきたい」と話している。

周りを見る力が徐々についている少年であれば実現できる。

他県の親戚のところで仕事をしようと決意している。

## 第4 まとめ

少年は、決して、非行を繰り返し社会内で孤立しているような存在ではない。

自分の性格を理解し、被害者の気持ちも徐々に考えることができている。そのような少年の現在の姿からすれば、少年には、信頼できる大人のフォローを受けながら仕事をし、規則正しい生活を送るなかで、専門的なプログラムを受講し、信頼できる大人の意見も聞きながら、自ら交友関係を考え広げていくことが必要である。

そうすると、少年に必要な処分というのは、保護観察処分である。

以上

- 1    ○月○日付少年作成の手紙
- 2    ○月○日に受け取った少年作成の手紙
- 3    ○月○日に受け取った少年作成の手紙